

本を読もう

【本を読むのは楽しいこと】

先日図書館の先生から本を紹介していただきました。1冊は「びんぼうがみとふくのかみ」という本です。貧乏神がいるとその家は貧乏になってしまいます。反対に福の神のいる家はお金持ちのなります。

昔あるところに、父さんと母さんと子ども二人の4人家族が暮らしていました。家族はとても貧乏な暮らしをしていました。朝から晩までお父さんと母さんは一生懸命に働いていましたが、暮らしはなかなか楽にはなりません。二人の子どもも手伝いをよくしていました。

ある年の大晦日の夜、父さんと母さんがお茶を飲みながら語り合っていると、屋根裏の方でゴトゴト、ガタッと妙な音がします。何の音だろうと思っていると、柱をつたわってズーッと降りてきたのは、へんてこな、ちいさくみすぼらしいじいさまでした。そのじいさまは「おまえがた、おどかしてすまなかった。おれ、この家に百年前から住みついていたびんぼうがみだ」

と、言いました。

さて、貧乏神の登場に父さんと母さんは、どうしたでしょうか……。

物語は、意外な展開となります。続きは是非図書館の本を読んでみてください。

もう一冊は、「風の中のマリア」という本です。マリアはオオスズメバチのワーカーといわれる働きバチです。ハチは女王バチだけが子どもを産み、他のメスは働きバチとして子どものエサをとってきたり、巣を作ったりして一生を終えます。女王バチは初めのうちメスばかりを産むのです。だから、ハチの世界はメスの世界です。しかし、女王バチは死ぬ前に子孫を残すためにごく少数のオスを産みます。ハチの世界は不思議な世界なんです。なぜそうするかということも、この物語を読み進めるとわかってきます。

オオスズメバチは虫などの肉を好むので、マリアは毎日毎日女王バチの産んだ子どものために、コガネムシ、カマキリ、バッタなどをつかまえます。時にはミツバチや同じスズメ

バチをエサにすることもあります。メスでありながら子どもを産むこともなく、虫をつかまえることに明け暮れるマリアは、自分は何のために産まれてきたのか、ふと考えてしまいます。このお話の作者は、オオスズメバチについてしっかり勉強して書いているので、自然界の仕組みを知る上でもとても参考になるのですが、それ以上にひたすら他の虫と戦って、そして死んでゆくマリアに感情移入してしまい、物語に引き込まれてしまいます。是非みなさんも読んでみてください。

「風の中のマリア」の中にこんな文章が出てきます。

「マリアたちの巣は山の西側斜面にある雑木林に囲まれた小さな藪の中にあった。笹が生い茂る藪の下の地面に直径10センチ足らずの穴が開いている。そこが巣のある洞窟の入り口だ。」

雑木林はいろいろな木がはえている林のことです。みなさんの知っている木がたくさんはえている林ですね。

藪というのは雑草や低い木、竹などがいっぱい生えているところですよ。

そして、洞窟というのは、中が空になった大きな穴のことです。

さて、みなさん、目を閉じてください。わたしがもう一度読みますので、マリアの巣はどんなところにあるか、頭の中に思い浮かべてみてください。

(もう一度読む)

いま、みなさんが頭に思い浮かべた景色は、一人一人みんな違います。

テレビならどうでしょうか。マリアの巣は、絵や写真や動画で移されますから、みんな同じ景色になります。しかし本を読むと、自分の頭の中に自分だけの世界を想像し、作り上げます。だから、それはみなさん一人一人の、みなさんだけの世界なんです。だから、本を読むのは楽しいんです。

小学生の時代に、できるだけ多くの本を読んで、心を豊かにしていけたらいいですね。